

MONTGOMERY (1938)	J. M. R.	1	165頁
森安茂雄 (1961)	Oceanogr. Mag.	12	67頁
宇田道隆 (1964)	Studies on Oceanogr.	89頁	
吉田昭三 (1961)	水路要報	65	1頁
吉田昭三 (1961)	水路要報	67	54頁

#### 4 本年冬春における房総沿岸の海況と漁況

上村清幸 (千葉県水産試験場)

##### 1) ま え が き

房総近海の冬春期の海況については、例年2～3月の頃を寒流系水帯発達の大期として沿岸水域の水温は表面においておよそ15℃以下に低下するとともに、ところによつてはその流域が次々に沖合へ拡大されていくため、これに接触して流れている暖流系水帯の流動分布にもかなりの変化(一般的には流軸が沖合に離れるようになる)を生じてくるものであつて、このような海況(水温、餌料生物の分布等、魚群の環境系の諸要素を含む)の変化に対応して魚群の回遊、分布にも変化を生ずることから、管内沿岸漁業の生産面も不安定性を免れ得ず、まれには長期間漁況不振をもたらすところとなつている。

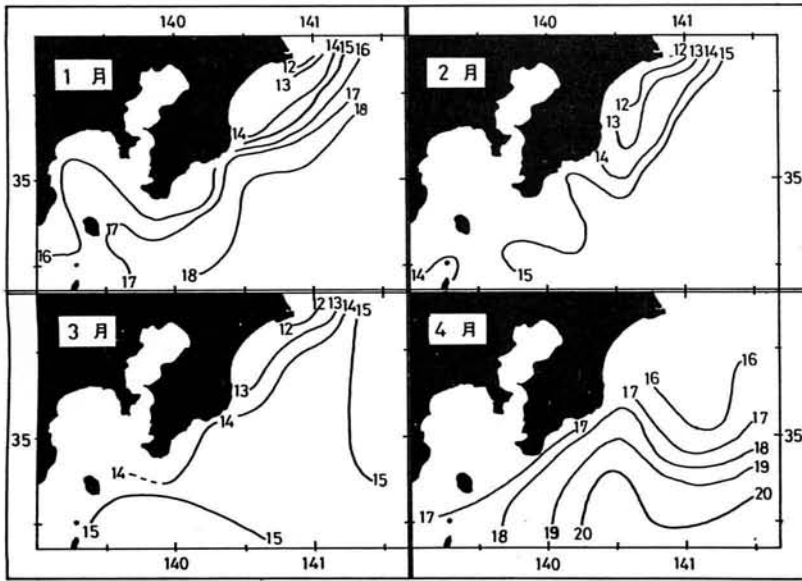
房総近海での最近における冬春期の異常冷潮現象は、昭和38年2月中旬に発生し、同年7月頃まで勢力を持続し、管内沿岸漁業にかなりの影響を及ぼすにいたつているが、これに対比して本年の海況の特徴となる点をのべると次のとおりである。

海況の低温化は、12月下旬頃にさかのぼつて、北部海域沿岸で比較的早期に発生しており、次々に流域を南に拡げ3月にいたつて極大に達しているが、この間低温域の中心部における水温の示度そのものは38年に比べるとかなり高目であつて、特に異常のものとは認め難いが3月中にみられた暖流軸の沖合への偏向と沿岸低温域の沖合への拡大現象だけは38年にも増してかなり特異な現象で、沿岸小型船によるサバー本釣漁業、その他に種々の影響を及ぼしてきたが、この現象も4月以降徐々に回復しはじめ、これにもなつて沿岸漁況も漸次好転の兆しがみられるようになつている。

##### 2) 海 況

才1図は、本場が才2ちば丸を充当して実施している定期海洋観測の資料から、1月以降4月までの各月の房総近海における表面水温分布を示したものであり、また才2図は海上保安庁水路部発行の海洋速報その他の資料から太平洋南岸域における黒潮流軸の位置を月別に示したものであるが、これらを総合して最近までの海況の特性を概説すると次のとおりである。

1月： 黒潮は前年秋以降に引き続き八丈島付近をとつて北上し、房総沿岸へと接近したあと、



才1図 房総近海の月別表面水温分布図(℃)

おおむね沿岸に並行して北東に流れており、距岸10～15哩以遠の沖合域の水温は17℃以上で、例年より若干高目であるが、北部の沿岸域は一般に低温傾向が強く、犬吠崎付近から九十九里地先にかけてはすでに11℃台の水帯が出現し、下層部にはかなり広範囲

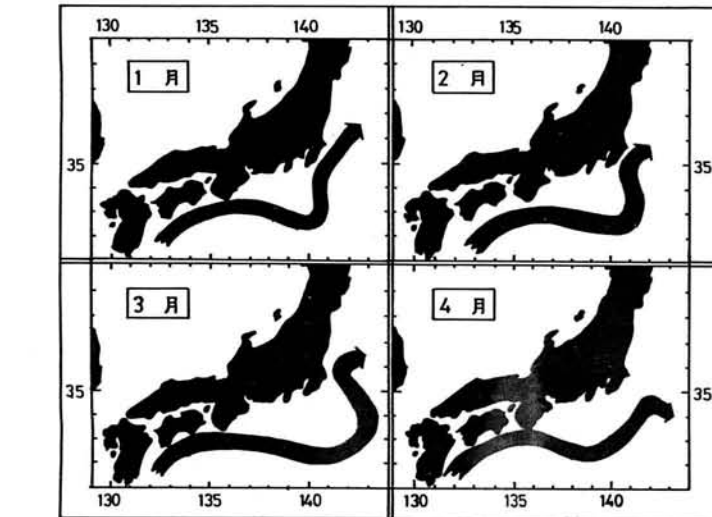
に冷水帯の形成が認められた。

2月： 黒潮の接岸傾向は房総南部でやや弱まりをみせ、犬吠崎南東沖合で進路を北に転じやや接岸をみせている。このため犬吠崎南東40哩付近では水温の上昇が認められるが、他の海域は全般的に低温傾向が強く、前月、犬吠崎～九十九里地先に出現した冷水帯の流域は次々に南に拡大されるようになっていく。

3月： 黒潮の流動と沿岸水帯の分布状況は、図によつて

明らかなように特異な様相を呈し、伊豆沖冷水塊につながりをもつ冷水帯の勢力拡大とともに黒潮の離岸が一層顕著となり、房総近海は15℃以下の冷水帯によつてほぼ全域がおおわれていた。

4月： はじめのうち黒潮は離岸傾向を持続し、これとともに房総沿岸の水温は3月と同様に引き続き低温であつたが、中旬以降房総沖合部を流れる黒潮の流向が北転し、房総南部沿岸へ向



才2図 黒潮流軸図

けて接岸しようとする態勢を示すようになってからは、房総沿岸海域では表面水温が急に上昇するところとなり、特に南部海域では前月に比べてその値が+5℃に達したが、北部海域の下層部には依然冷水帯がかなり強く残存していた。

なお、本年4月下旬における海況のなかの水温値を昭和38年以降5年間の平均値と対比してみると、(1)野島崎南東20m層・・・表層+2℃、100m層+4℃、(2)犬吠崎南東30～40m層・・・表層-2℃、100m層-4℃で南部が高目に転じたのに対し、北部では依然として低温で海況の遅れが目立っている。

5月： 季節の温暖化とともに、表面水温は全域にわたってかなり昇温し、黒潮も逐次接岸の度を強めてきたが、野島崎沿岸、九十九里～犬吠崎沿岸には規模を縮小しながらも依然として低温水帯が停滞し、局部的に黒潮の北上を阻む態勢となっており、これによつて外房沿岸海域には暖水帯の反流域が形成されている。

今後は夏に向い暖流の増勢とともに、房総沿岸での冷水帯は逐次その規模を縮小していくものと考えられるが、伊豆諸島線以西海域にはいまだに八丈島近海までを包含するほどの大規模な冷水塊が存在しているので、黒潮はここ当分蛇行性を持続するものと予想され、これによつて房総沿岸海域の海況も短期的に、しかも局部的に小変動をくり返すものと予想される。

### 3) 漁 況

1月以降、最近までの主要漁業別に漁況の特長を概説すると次のとおりとなつている。

サバ一本釣漁業： 12月下旬以来、銚子近海より勝浦近海に魚群の回遊を認めたと、浮上性がなく遂に漁場形成をみるにいたらず、1月中旬以降は大型船によつて銭州近海への出漁が開始され、おおむね4月末まで好漁が続いたが、5月に入つて群の北上、分散傾向によつて大室出し、外房沖に漁場を形成するようになり、小型一本釣漁船にもようやく着業の機会が与えられるようになつてきた。

1月以降4月末現在までの本県船の漁況を集計すると総漁獲量34,082トン(延出漁隻数4,043隻)で1隻平均漁獲量は843トンと平年並になつている。

まき網漁業： 銚子近海(鹿島灘を含む)から外房北部沿岸にかけてのカタクチ漁は12月以降2月中旬まで好漁を続けたが以後不漁となつた。しかし、同期以降銚子近海を中心にサバ(小サバ主体アジ、イワシ混り)の好漁がみられるようになり、5月現在でも引き続き好況となつている。

内湾地方のイワシ漁は例年になく不振のうちに経過し、特に5月に入つてカツオ餌料用としての生イワシの需要面にひつ迫した状態が続いたが、中旬以降カタクチ(新子)の来遊によつて漁況は好転した。

なお、九十九里～外房海区を漁場とする、まき網の今年の漁況を要約すると次のとおりである。12月～2月のイワシ類(主としてゴボウセグロ)は大原港の水揚量を例にとれば、前年同期よ

りも1.7倍弱の7000トン余であつたが、3月以降それらの漁獲はまつたくなく、各船とも小サバを主対象とするにいたつた（前年3月の同港での水揚量は約900トン）

定置網漁業： 42年11月以降、外房瀬戸漁場を先発として、外房海区では鴨川、江見、和田、白子の各漁場。また内湾海区では金谷、波左間、香、岩井、勝山、保田の各漁場が着業し、操業を続けているが、各漁場とも2月以降の漁況にはほとんど見るべきものがなく、大部分の漁場が極めて深刻な不漁に見舞われているようである。

本年の特長としては、外房海区では例年1月、3月の2期に分けて乗網する南下ブリ漁が皆無の状態であり、またアジの漁獲も激減するところとなつている。外房海区での特異なものとしては、初漁期以後1月頃まではイカと小型のムツが例年になく出現し、2月中旬には少量ながらインダイが各漁場に共通して漁獲されており、海況的には漁場における水温低下が顕著であつた。内湾海区においても各漁場とも、小サバ、イカ、アジ等の少漁をみるのみで、長期間不況の経過をたどるものが多くなつている。

小型一本釣漁業： 小型一本釣漁船の漁況は銚子、外房沿岸でのサバはね釣漁場の不成立を主因として、全般に不振のうちに終始した感が強いが、外房北部沖で前年秋以降スルメイカ漁が比較的長期にわたつて持続し、また才1表にみられるように1月以降にはメダイ（魚体小）が好漁をもたらしたのを始めとして、2月以降にはキンメ、3月以降にはアコウ等がこれに加わり、底魚類が不時の大漁をもたらした。

才1表 勝浦港における底魚類の水揚量  
(1~4月)

魚種	水揚量 (トン)		
	41	42	43
キンメ	67	84	127
メダイ	10	4	98
アコウ	5	6	25
ムツ	2	2	1
合計	84	96	251

## 5 本年冬春における伊豆諸島近海の海況と漁況

阿部 登（東京都水産試験場大島分場）

### 1 まえがき

昭和38年初冬～春季にかけて伊豆諸島近海の水温は極度に低下し、多数の魚類がへイ死漂流するのがみられた。以後39年～42年まで大体低温年を持続してきたが、43年2月から再び低水温に見舞われ、現在なおその傾向を示している。この低水温は伊豆諸島に限らず東海および関東南岸一帯に現われており、特に伊豆諸島近海の低水温が顕著で、38年と異なり長期間持続